The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ 稲田篤信著『名分と命禄ー上田秋成と同時代の人々』
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	国語と国文学. 2007, 84(6), p. 75-79
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48810
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

稲田篤信著『名分と命禄　上田秋成と同時代の人々』

飯倉洋一

すぐれた研究者は固有の文体を持っている。それは、その人の問題意識の深さと独自の視界、そして問題を考察していくときのリズムから生まれるものだろう。本書の著者も稲田文体と呼ぶべきものを持っている。淡々と記述を進める中に突如として挿入される評言。連想的に呼び込まれる意外な文献。あっさり途切れる各論の終り。研究書の文体として、それらはやはり特異だといわざるを得ない。著者は結論と言うべき部分を縷々述べない。むしろそこに至るのに用いた文献の情報を提供することに丁寧である。もちろん結果としてこれらの情報は、後学によって有益に活かされよう。そのことに配慮したと思われる著者の良心には敬意を表する。ただ、一個の論文として読むときに、バランスの点で首を傾げるものもあったことは述べておきたい。もとより著者は、そのような批評を承知の上で自身の文体を貫いているのだとは思うが、各論とも、もうすこし書き込んでいただきたかったというのが率直な感想である。

『名分と命禄―秋成と同時代の人々』という書名も特異である。これは秋成研究でもなく、文壇研究でもない。あえていえば、近世

思想論である。近世人の倫理を根幹から規定していたものに迫るということ。なぜ死ななければならないのか、なぜ見捨てなければならないのか、なぜあきらめなければならないのか。それらの懊悩・葛藤が「名分と命禄」というテーマに集約される。それをすぐれて近世的な文学モチーフとみて、秋成を中心に追求したのが本書なのである。無論、その問題意識が現代に生きる著者自身の切実なものでもあることは推測に難くない。「無言のうちに期待される人物像に同一化するのは、今なお現代日本人を呪縛する心性である」（「あとがき」）。著者自身がいうように、個々の論文はそのテーマに最初から絞って書かれた文章ではないが、全体としては、名分論のテクストとそれを生んだ背景を論じるという点で統一的に構成されることになった。

本書は二部構成である。第一部は秋成の著作について、名分論・命禄論の立場から考察した十編の論、第二部は、秋成と同時代の人々とその思想をやはり同じ立場から描き出した八編の論から成る。「全体として、中国明清の文学学芸の刺激によって、近世中期の人文社会に浮上した課題として論じている」（はしがき）という。以下いくつかの章に触れる。

第一部第一章「分度と逸脱――『雨月物語』の作中人物――」は、冒頭に「養子」に対する見解が相違する福沢諭吉とその兄のことを記した『福翁自伝』を引用し、「養子になってみたい」兄と「養子はいやなことだ」と思う諭吉を対照させることから議論を始めようとする。「養子」とは、名分論を考える場合にきわめて重要な論点を提供するものだからである。「養子」という「血縁を模倣した義理の関係」は「血縁の関係に同化することを求められ」る点に「関係の本質がある」。私なりに纏めると、「養子」に典型的なように、共同体内の人間関係の位置を「名」で表現したもの、たとえば「嫁」「父」「臣」「惣領」「お世継」などは、それぞれに対応する「分」がある。この「分」を自覚し、守ることが「善」（近世的倫理）であり、自覚せず（あるいは自覚しつつ）逸脱することが「悪」である。近世文学が一貫して主題としてきたのが、この「名分」をめぐる葛藤である。『雨月物語』はこの名分から逸脱する人々が代償として恐怖を味わう物語だと著者は言うのである。

第二章「調戯の主題――都賀庭鐘『英草紙』・『雨月物語』・曲亭馬琴『八犬伝』――」は、妻の名分を主題とする三話を題材にしたもの。「調戯」は『八犬伝』に出る語で「女性を戯弄すること」（三五頁）である。著者はこれをキーワードに、妻の名分を論じようとする。ただ、三話を「調戯の主題」として一括して扱うのはやや強引な感じを否めない。『英草紙』の「黒川源太主山（ぬし）に入ツて道を得たる話（こと）」は自分が死んでも貞淑を守れるかを夫が試す話であり、『雨月物語』「浅茅が宿」は別居時に別の男たちに言い寄られることに耐えかねて自死し亡霊化する妻の話であり、『八犬伝』荒芽山一段の一節は離散した

二組の夫婦が再会したときに気づかなかったという話であって、それぞれレベルが違う。この『八犬伝』のなかに、久しく会わなかった妻をそれと気づかずに懸想した秋胡の振る舞いを「調戯」と呼んでいるところから、系譜を立てたことは理解できるが……。ところで著者によれば、中国明清社会において「婦道の規範を厳しく要求する現実と風潮」があり、そこから「改嫁」を容認する言説が現れるが、これらの三話の背景にこの改嫁言説を置いてみると面白いというのである。「黒川源太」の夫婦義合論と庭鐘と同時代の臧庸の言説が酷似することの指摘は興味深い。時代的に言って影響関係を云云するのは無理で、著者のように同じ空気があったというにとどまるだろう。著者としてはそれで十分なのである。

第六章「名分論の光景――「源太騒動をめぐって」――」は、「父が不在のために、父の名分において、父の役割を果たしていく」渡辺源太の名分論の意識が、明和安永の時代の空気を反映していたという仮説である。ここでは名分論の明確な定義があるので引用しておこう。「名分論とは、近世身分社会を基礎づける論理であり、この構造が弛緩し、各分際相互の間の差異が明瞭でなくなった時、社会と個人が本来あるべき位置とは何か、帰属本分を自省する言説であり、あるべき姿に自己を同一化する機制である。」著者は、『妹背山婦女庭訓』、『西山物語』、『雨月物語』の「菊花の約」などの明和安永期作品における名分論的状況を析出し、加えて天明寛政期の高山彦九郎が祖母の死に服喪三年を費やしたことは極端な名分の立て方であるが、その時代には奇行に映ったことを指摘して、名分論的光景が変質したという。これはやや短絡的な気がする。著者の意図は、明和安永期を名分論の時代として位置づけることにあるようだが、注2で自らいうように、それ以前もそれ以後も名分論は存在するわけで、近世中期に特定しようとする本論は、著者がこの章で二回用いていることばを借りれば、「印象的」な批評の域を脱していないようにも思う。

第七章「発見と幻滅―「春雨物語」の発想」では、秋成が考察した金印、草稿の古井戸に投棄された秋成草稿、「宮木が塚」の主人公のゆりあげと古杙、「二世の縁」の土中入定からの蘇生などに、「深く隠れて、成熟の時を進行させ、やがて出現するモノ」という共通項を見出し、これに鄭思肖の古井戸に埋めた原稿が明末に出現した経緯が『心史』に書かれていたことを結びつけてみせた。土中入定と金印を類比させる発想に発表当時驚いたものである。秋成自らが、草稿投棄と、森川竹窓に教えられた『心史』の記事を「同談」と位置づけていたこと（『胆大小心録』）を著者は指摘する。

第九章「勧善懲悪と命禄――建部綾足『本朝水滸伝』と『春雨物語』の主題――」は、『本朝水滸伝』『春雨物語』に共通する命禄思想を馬琴の言説と対応させて、「文学は人情を道ふの説」を受け継ぐ、反勧善懲悪思想だとする。異論はないが、ではその思想的背景はどこにあるの

か。本書全体の基調から言えば、明清の文学学芸思想との関わりに触れるところがあることを期待したのだが……。

次に第二部。第四章「和文のイデオロギー――建部綾足『折々草』一面――」では、「綾足の採用した文体（和文）は、扱われた俗なる世界の配置を相対化したり変更する装置であ」り、「名分論的なイデオロギーによる再編がもっとも突出したものである」という。身近な出来事を和文で書くことの意味を、かつて私も和文の書き手の主体的問題として考えたことがあったので（拙稿「和文の思想」）、この指摘には虚を突かれる思いがした。しかし、和文がイデオロギーを含む文体である理由が十分には論じられているとは言えず、納得するには至っていない。

第五章「明人文集と上方の学芸――奥田松斎『拙古堂日纂』を視座にして――」の結論は、綾足や蒿蹊の和文に明文の影響があるのではないかという仮説を提示するところにある。『鉄網珊瑚』『明文英華』ら明人文集に松斎がいちはやく注目していること、しかもそこに引用されている帰有光の文章について、社会正義を論じる部分ではなく、名分論に殉じる人物の話題に着目しているということを著者は重視する。そこに綾足の『折々草』の「孝女」説話を重ねてみると、使用人や養女の名分の徹底というイデオロギーが、帰有光と共通するというのだ。その論理は、しかし、少し飛躍があるような気がする。松斎が『折々草』を再編した『漫遊記』の序を記したことは確かだが、綾足・蒿蹊自身の明清文集への接近を述べておく必要があるのではないか。個人的には秋成をはじめとする上方文人の和文と明代詩文との関わりは重要なテーマだと思う。

第六章「上方の学芸――森川竹窓覚書――」は、浪華の書家森川竹窓の略伝。上方の知性の典型としての竹窓の伝を年譜形式で叙べる。著者は奥田松斎や森川竹窓のような蒹葭堂周辺の人物を並べていくことで、秋成とその周囲に流れる空気を伝えようとしている。

第八章「近世の継子小説」で「夢は名分的世界が抑圧した感情世界である」（二七七頁）と言うように、著者の描く名分的世界はどこか息苦しい。名分的世界が感情を抑圧するという図式は、ややステロタイプな近世文学論の前提を思い出させないだろうか。むしろ著者の本領は、「義理と人情」的図式に持ち込まず、名分という本来（当為）性とのズレの自覚（無自覚）に文学モチーフを発見したところにあるのだろうから、「抑圧」という言葉は相応しくないと思う。

本来（当為）性とのズレとは浮世草子の気質物や、戯作の解析にも応用可能な方法だと思われる。歴史家尾藤正英が『江戸時代とは何か』（岩波書店）で江戸社会を「役の体系」と捉えてみせたこと、池上英子が『名誉と順応』（NTT出版）で武士精神を社会学的に分析してみせたことなど、名分論的世界に対して、さまざまな切り口があった。上方学芸社会と初期読本を主な視座として論じ、文学モチーフとしてこれを論じた本書はユニークであり、貴重な成果とし

て今後に益しよう。

ただ望蜀の感なきにしもあらずである。総じて著者は第一部第七章注3でいうように、「都市文化の成熟――明風の受容」（『十八世紀の江戸文芸』）などの中野三敏の論を踏まえて明清文人の影響という視点を展開しようとしているのだが、かつて秋成の文学論の背景に明風の影響を指摘した中野「寓言論の展開」（『戯作研究』）のごとききめ細かい実証が不足している憾みがある。中国明清文献をはじめとする、広範な参考文献への目配りがあり、第二部第三章「地域の事件――麦水『三州奇談』の成立――」の注2に記されるような詳細な諸本書誌に典型的なように、手抜きをしない調査に基づいていながら、最も肝心な部分において、たとえば「空気」という言葉で説明してしまうようなあいまいさが漂うのは残念でならない。

とはいえ、本書の価値は、近世中期において名分論というモチーフが重要な文学的主題になったことを抉り出した点にあり、それはきわめて説得的に論じられている。仮説的切り込みなしには不可能なことだから、著者の洞察にはあらためて敬服する。

本書全編に漲る著者の学識に舌を巻きつつ、書評を引き受けてしまったことを後悔したが、居直って感想文めいた蕪辞を連ねることとなった。誤読誤解もあることだろうがお許しいただきたい。最後になったが、本書から教えられたことは実に数多く、第一部第三章からは、執筆中の拙論に直接益する情報を得るなど、私にとってきわめて有益な一書であったことを告白して、筆を擱く。

（二〇〇六年二月刊　A5判三〇〇頁　定価六〇九〇円　ぺりかん社）

――いいくら・よういち／大阪大学教授――